

Ⅲ 事業の評価

1 事業の成果

現在、当館を含む博物館を取り巻く情勢は大幅な展示更新などなかなか望むべくもない厳しい情勢にある。一方、変化の激しい社会にあって、博物館を含む生涯学習施設に対して求められるものも大きく様変わりし、かつ新たなニーズも次々と生まれてきている。博物館等の社会的な位置づけにおける存在価値は、変化を伴いつつもむしろ重要性を増しており、それに対応する体制作りもまた急務となってきた。

これらのことを踏まえ、当事業自体は単年度事業ではあるが、その成果が次年度以降にも継続して生かしていけることを前提とし、既存の博物館活動を基盤とした3部門を切り口として取り組んだ。各部門の実践については既に詳述されているが、「既にあるものを生かし、これまで以上に十分に活用する。」という認識を基本として取り組んだため、さほど大きな業務上の負担増を生じることなく実践に取り組み、様々な形で成果を挙げることができた。

学習プログラム部門では、散在していた教材やテキスト等を整理・精選し、新規に開発したものと併せて多数のプログラムを整えた。その結果、このところ増加してきている工作や実験等の体験活動の要望に対する対応がスムーズになった。実践においても、豊富な選択肢がまとまった形で用意されているため事前の打ち合わせ等も明確な見通しを持って行うことができた。利用者側は参加者の実態に合った内容を適切に選ぶことができるため、いずれの実践例においても好評を博した。実践を通じて得られた感想や反省点、アイデア等を学習プログラムにフィードバックして生かすことができたことは、当館側にとっても大きな収穫であった。このことは、当館が本来持っている学習資源の活用のしやすさが大幅に向上したことに意味づけられる。

表 3-1 学習プログラム部門参加者の声

- ・シャボン玉が心にのこっています。「シャボン玉はなんでうくのだ。」ということの家にかえっても五回も言っていました。(小1)
- ・私がすごいと思ったのはせい電気のじっけんです。せい電気のでビニールのテープがういたのがびっくりしました。(小2)
- ・じっけんはおもしろいものばかりありました。もともと理科がすきなわたしはもっとかがかがすきになりそうです。(小4)
- ・とても楽しかったのは「まぼろしのかべ」の工作です。見るだけでなく作ることによって、「仕組みはこうだったのか。」ということを手や体で実感しました。(小6)
- ・自分の知らない教材教具作りはこれからの指導に役立った。(教員研修参加者)
- ・内容を科学館と学校で一緒に考えていくのもよい研修になる。(教員研修参加者)

※感想は原文のまま。

※教員研修参加者に対してはアンケートを通じて、工作教室の題材の適性、工夫点、改善点等についての意見を得た。

科学館スタッフ体験部門では、今年度は主に中学校からの職場体験学習の受け入れを中心に取り組んだ。この種の要望もこのところ増加してきているが、プログラムメニューを整えておくことにより受け入れ態勢がさらに向上し、体験者のめあてや希望に即した内容を実施することができ、学校側の期待にも十分応えることができた。また、当館についての理解を深めてもらうこともできた。今後例えば教職員研修の一環としての社会貢献活動や学生ボランティアの活動等に関してもますますニーズが高まることが予想されることから、この部門の取り組みは、当館側としても対応の体制作り大いに役立つ結果となった。

表 3-2 科学館スタッフ体験部門参加者の声

- ・進路を考える上で役立った。科学館の違った面を知ることができた。(複数)
- ・デジカメを使うのはなれてなくてきんちょうしましたが楽しかったです。早く資料づくりをしたいです。目ひょう2枚です。
(小5：展示紹介記事作り)
- ・いろいろ大変な仕事があり、少ししか体験できなかったけれどその少いで疲れてしまったので、仕事をするということは本当に大変だと身をもって知った。(中3)
- ・理科のことや公務員のことなどいろいろなことを楽しみながら学ぶことができるとても楽しく、また自分のためになったと思う。
(中3)
- ・仕事をする上で、他人に対しての気遣いや仕事の楽しさ、つらさがこの体験を通してよくわかりました。この経験を生かして人生を生きていきたいです。(中2)

※原文のまま

この両部門では団体利用や講師派遣の打合せにおいて当事業への参加協力を得た学校・社会教育施設等を対象に実践を行ったが、いずれもそれぞれの学校や地域における学習活動に対して当館が大きな役割を果たすことができたといえる。当館側としても既存の博物館活動を子細に再点検する機会を得たことにもなり、館自体の教育機能の活性化と併せて将来的にはより幅広く対応していくことの発展性と可能性を確認できることとなった。

子ども向けホームページ部門では、調べ学習に対応したコンテンツを中心に取り組んだ。学習プログラム部門や科学館スタッフ体験部門が、基本的に来館者を想定対象としているのに対し、この部門はいわば不特定多数の学習者を対象としている。そのため評価やそれに基づく改善は今後の課題となるが、豊富な資料や情報

を持つ当館は、調べ学習においてデータバンク的な役割を期待されている面があるため、今回の取り組みはそのようなニーズに十分応えていけると考えている。

2 今後に向けての課題

事業全体を通じて明らかになってきた課題を以下に列挙する。

- ・現段階では学習プログラム部門のコンテンツの貸し出しまでは対応しておらず、基本的には来館による利用者を想定対象としている。この部門に限らず今後ますます増加すると予想されるアウトリーチの要望にどのように対応していくか検討が必要である。
- ・今年度は委託事業であるという性質上、利用者側が当館側で用意したプログラムに参画するという形が中心であったが、利用者側の主体性に基づくさらに幅広いニーズにも対応できるような体制を整えておく必要がある。
- ・今回の実践の紹介や当館側の体制について、館の広報活動や「子ども向けホームページ」等を通じて広めていくことも必要である。

これらを見ると、再三述べてきたように当事業が平常の博物館活動をベースとしていることから今後に向けての課題が「むしろ次年度以降どのように継続・発展させていくか。」に集約されているといえる。

今回の事業における実践の蓄積は、いくつかの課題を明らかにしつつも当館の貴重な財産(=学習資源)として悉くフィードバックされ、次年度以降の博物館活動に無理なく自然な形で生かされていくこととなり、事業の趣旨である「博物館活動の活性化」「学習資源や教育機能の地域における積極的活用」さらには「科学技術・理科離れ防止」に正しくつながっていくものと考えている。